
空中列車 - aerial train -

高戸 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空中列車 - a e r i a l t r a i n -

【Nコード】

N 4 6 8 2 Z

【作者名】

高戸 優

【あらすじ】

もし死者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと望みますか？

もし生者に逢えるのであれば、貴方は誰に逢いたいと願いますか？

逢いたいと望むのであれば、自然とある駅舎へとやって来てしまいます。

そこで待っているのはキャラが濃い方々。

これはそんな方々の手を借りて逢いたいと想う人へと逢いに行く…
そんな物語です。

ラビット・アイ（１）

——もし、死者に逢えるのだとしたら。

——もし、あの時のことを償えらしたたら。

——もし、やり直せるとしたら。

——貴方は逢いたい、償いたい、やり直したい、と思いますか？

「……さーて、キミが新しいお客さんかい？」

そう言いながら、少女はボタンと読んでいた本を閉じる。

年は一三ぐらいだろうか。背は小さく、ぶかぶかの駅長の服で身を包んでいた。袖は彼女の小さな手を隠しており、結構だらしない格好となってしまうている。

肩口で切りそろえられた黒髪。深い深い緑色の瞳は少しつりあがつており、年相応な可愛らしい顔立ちを更に可愛く見せていた。

そんな少女は真っ白な指先にてピツ、と目の前に居る少年を指す。

「このボクが聞いているにも関わらず無言とはいい度胸だねえ新客さん？」

それを聞き、少年はただ首を傾げるだけ。

年は一五。茶色の髪に黒い瞳、ガクランで細身というどこにでも居る格好の少年だ。少し異色といえば、男子にも関わらずファンシ―なウサギのマスコットをバックにぶら下げている事ぐらいだ。

少年――センサキハヤト千崎勇人は首を傾げつつ、少女に向かってこう返す。

「……それ以前にここは何処だよ？」

「分かっているくせにとぼけるんじゃないさ。それは他人をムカつかせる所業だ」少女は軽いため息を漏らして「……さてさて、もう一度だけチャンスをやろうじゃないか。さあ、何か言ってみるかいさ」

「……だから、ここは何処だよ？」

「同じ質問しか出てこないとはキミは実に語い力が富んでいないと見た。……ふう、こんなのが次のお客とは先が思いやられるね」

それを聞き、勇人は少しだけむっとする。そして「そっちこそ何なんだよ！！ 名乗りもしねえのか！？」

「おつとつと、名乗っていなかったっけ？ ……まあ、名乗っていなかったならば今名乗るまでさ。ボクの名前は桃天トウテン 夜美ヨミ。果実の『桃』に天照の『天』、美しい夜さ。実に面白い字体だろう？ さあ、ボクは名乗った。だから次はキミの番さ」

「……………」彼は腑に落ちないという表情をしながらそっぽを向き「……千崎勇人」と不満げに漏らす。

「ふむ……センサキハヤト、ねえ……」

そういうと、少女は目の前にある木製の古びた机の上にあった書類を手に取りパラパラと眺め始めた。

「さ、し、す、せ……センサキ、センサキ……おや、どうやらリストには載っていないみたいだ」

「……それって何だ？」

「ん、コレかい？ コレは死者に逢いたいという想いを持っている者たちのリストさ。大抵このリストに載っている者がここに来るんだけど……どうやら、キミは死者に望まれたクチらしい」

そう言いながら夜美はひらひらとリストを振る。その光景を見て少年は眉をひそめて「……それ以前に、ここは何処なんだよ？」

「おや、ここまで言ってまだ分からないとはキミは馬鹿だけでなく阿呆でもあるらしい」

少女はそう呟くとトン、と軽い音と共に椅子から地面へと降り立った。タンタン、と革靴を鳴らして外へと赴く。その後に、少し躊躇っていた勇人も続く。

そして外へ出た瞬間——ぶわつと暖かな風が彼の体を包み込む。

（何だ？）顔を上げると、桜の花びらが彼の髪に乗っかる。

摘まんで花びらを軽く眺めた。それを見てふつと淡く儂く笑う。

花びらを手中に入れながら彼は夜美の元へと歩いていった。彼女は桜が舞う所で呆れたため息を漏らす。

「早く来ないかい。女子を待たせるとはキミは男として最低最悪だ」

「そっちが何の説明も無く行っちゃったからだろうが!!」

「全く、折角このボクが直々にキミにここが何処か教えようとしていたのに……この恩知らず……」

「おい、今小声で何言いやがった?」

「まあ恩知らず!! はおいておいて、だ」

「お前大声で何言ってやがんだよ本当に!!」

「そんな小さな事は気にせず、見てみたまえ」ピツと先ほどまでの建物を指して「ここが、その正体さ」

そう言われ、彼はゆっくりと振り返る。建物は古い駅のような形をしていた。

木造建築で駅名が書かれる筈のプレートは真っ白なままだ。古びた感じを纏っており、何時でも壊れてしまいそうなレトロな雰囲気を持っている。

勇人はもう一度じつと眺めてから「……………いや、やっぱり分かんねーんだけど…………」

「何だつて？ キミはやっぱ馬鹿で阿呆で無知童貞野郎なのかい？」

「お前はアレか、俺を怒らせてえのか？ 誰が馬鹿で阿呆で無知だつて！？」

「童貞は否定しないのかい？」

「……………」

「ふむ、ボクは血も涙も無い訳じゃないからね。深追いはしないでおこう。まあ、ここの説明だが……簡単に教えるのは実につまらない。そうだ、ヒントを出すから答えてくれ」

少女は腕を上げる。ダボついた駅長の服から真つ白な細い指を五本伸ばした。そしてグーを作り上げてから人差し指だけを伸ばす。

「ここはただの駅じゃあない」

「そりゃそうだろ。さっきからレールはあるっぽいのに電車全く走ってねーし。つかお前が駅長つて時点で可笑的いから……」

「五点」

「手ひどい答え来た！？」

「一〇〇点満点だから頑張りたまえ。頼むからボクを失望させないでおくれよ？ さて、次のヒントだ」中指も伸ばし「駅と駅を繋ぐ場所じゃなく、ある世界と繋ぐ場所だ」

「……ある世界って何だよ？ 死者の世界とか？」

「ふむ。二三点。若干惜しい所へ来ているが……」

「……死者の世界が惜しい？」 勇人は何時の間にかマジメに考え始め「……まさか……天国とか、地獄とか？」

「五〇点」

「え、じゃあここは俺が生きてる世界と天国とか地獄とかを——」

「ふむふむ、まあ九〇点くら——」

「繋げて俺の生きてる世界で死んじまった奴の魂を天国と地獄へ葬送する場所なのか！？」

「マイナス一〇〇点」

「マイナスってあり！？」

「行き過ぎだ。途中までいい線を行っていたにも関わらず、キミは実に悲しい少年だよ」ふう……、と夜美は重いため息を漏らす。

このやり取りを続けても終わりが見えないと思ったのか彼女は手を下ろし「答えを教えるさ」と呆れた声で呟いた。

「ここは二度と出会えないはずだった、生者と死者を繋げる駅。生者が死者に逢いたいと望めば。死者が生者に逢いたいと望めば。ボク達がその願いを叶える場所さ」

さて、と呟くと少女は妖艶に笑う。年不相応な、怪しく美しい微笑を湛えて彼を射抜いて、小さくそれでもはつきりと囁いた。

「——キミに逢いたい、と願っている人にキミは逢いたいと思うかい？」

ラビット・アイ (1) (後書き)

初めまして、高戸 優と申します。

駄文すいません…グダグダ展開すいません…。

少しずつでも更新していこうと想うので、どうか温かく見守ってください。

次回は話も進むと想うので…。

では、また逢えましたら♪

ラビット・アイ（2）

「…………いや、話がぜんっぜん読めねーんだけど？」

勇人がそう言いながら呆れた表情をしていると「ふむ、まあ馬鹿である君には致し方がないな」と言つてのける。

「まあ要約すると『キミはリストに居ないから死者に逢いたいと想つていない。ならば死者に逢いたいと願われている。だからその相手に逢いたいかな答えろやー…………あ、でも誰がキミに逢いたいと想っているか分からないな。だからキミに逢いたいと願っている人が分かるまでそこで待つていてもらえるかい？』という事さ」

「長い！！ 要約が予想以上に長かった！！ そして分かつてないんだな！？」

「あんな短時間でキミに逢いたがつている死者が分かると想つていたのかい？」

「凄い不機嫌な声で返された！！」

彼がズガン、という効果音を背負つて驚いていると少女は軽く手を振る。すると「はいはいー」と妙に間延びした声が返ってきた。声のした方を見るとひょこつと駅舎の後ろから一人の女性が出てくる。

青髪を後ろでポニーテールに結っている黒い瞳のスタイル抜群の女性だった。年は一九位だろうか、メイド服を着用しており、手には箒を持っている。雰囲気はぼわぼわしており可愛らしい感じた。

そんな女性に向かって夜美は「木夏。今すぐ死者の方のリストを持ってきてくれないかい？ この馬鹿に逢いたがっている奴の顔が見たいんだ」

「はいー、かしこまりましたー」

女性はにっこりと笑うと箒を握りながらぱたと走って駅舎の中へと入っていく。勇人はその後姿を眺めながら「……今の誰だ？」

「ん？ ああ、詩伊瀬^{シイセ} 木夏^{キナツ}。ボクと一緒にここを管轄している奴だ」

「……………何でメイド服？」

「……………」その質問に対し、夜美はふっと視線を逸らして「……………アイツの趣味、かな……………」珍しく戸惑った声を出す。

「……………」

「まああの趣味が全く理解できない木夏は放っておいて、だ。アイツが管轄しているのは死者の想いを書き連ねたリスト。故、キミに逢いたがっている奴がすぐに見つかるはずさ」

そう夜美が言っていると。木夏はぱたぱたーっと走ってきて「はい、夜美様ー。リスト持ってきましたよー」にっこり笑顔で差し出す。

「ん？ ああ、ありがとう。さて、センサキに逢いたがっている奴は……と」あれ？ とした表情を浮かべ「何か早々に見つかって不気

味だな」小さく呟く。

そしてその人物の資料を差し出してきた。

「名前は英田友恵^{アイダ トモエ}。死亡時期は去年の一月一六日午前四時五八分。へえ、死亡してからまだそんなに時間は経っていないね」

そんな風に夜美は呟いていたのだが……ふと異変に気がついた。勇人から返答が一つもないのだ。彼女が不思議そうに顔を上げると——彼は、遠くを見つめていた。

視線は夜美に向いているのだが、上の空で。まるで遙か彼方の思い出を思い出しているようだった。

そんな彼の中にとある声が響き渡る。

昔、よく一緒にいた少女の声。

『勇人、勇人っ！！ ほら見て、雪だよ雪——！！』

真っ白な病室の中で無邪気な声をあげ、雪を指差す満面の笑みの少女。

『綺麗だねー』 本当綺麗だねー……触ってみたいなあ……でも雷原さんに外出するな、って言われてるから怒られちゃう……』

主治医の名前を呟きながらむうつと頬を軽く膨らませる少女。

『もー、勇人どこ行ってたの？ ……あれ、手に何持ってるの？ うわぁ、雪！？ もって来てくれたの！？ ありがとう！！ やっ

ぱり勇人は優しいねえー」
♪

雪に触れた、というだけで更に楽しげに笑う少女。

「……と」

「と?」

夜美が首を傾げ問いかけると勇人はまた呟いた。

「と、も……え……。……友恵が、俺に、逢い……。たがってんのか?」

「だからそう言っているだろう。そんなに信じられないなら――」

「……俺も、逢いたいんだ」

「唐突にこの馬鹿はどうしたんだろうね?」と木夏に問いかけると
「混乱していらっやいますねー」とぼわぼわ声で返された。

そんな声も聞こえないらしく、勇人は変わらずに呟き続ける。

「……俺、も逢いたい……。……聞きたい、こと。話したい、こと。
たくさ、んある、んだ……。少しで、もはなし、た、い……。だ、
から……。逢いたい……。」

そう呟いていると、夜美は呆れたため息を漏らし「……ボクは他
者の過去を聞くのはひどく辛い性質なんだ。だから、列車に乗って、
木夏にでも話せばいい」そう言いながら親指で何時の間にかやって
きていた列車を指す。

勇人はこの駅の存在を認めた訳ではない。だけれど。

友恵が自分に逢いたがっている、と聞いて。少年の足は勝手に歩き始めた。

ラビット・アイ (2) (後書き)

ようやく逢いたがってた子の名前が出てきたのに全然進まないですねー。

すいません…進むの遅くてすいません…。

次回も早めに投稿できると思います!!

ラビット・アイ (3)

暫くして彼がふつと意識を取り戻すと、ホームの中へといた。何時の間にやって来たのか全く分からず呆けてしまう。

そんな彼の目の前には昔の形をした全体は黒、屋根部分は赤という列車が止まっており、その前に一人の少年が立っていた。

真っ白な髪に金色の髪がまばらに混じっている群青色の瞳の少年だ。服装は灰色のパーカーにジーンズという実にラフな格好で、この駅長とメイド服という中では至って普通だ。

そんな少年はちろつと勇人を見るが、すぐにふいつと視線をはずしてしまう。

(……あれ、俺初対面にして言葉を一言も発する間も無く嫌われた?) そう思っている彼に対して夜美は「悪いね。彼はこういう性分だから」と小さく呟いてくる。

「まあ、紹介することにしよう。彼の名前は未架西^{ミカニシ} 結斗^{ユイト}。この列車を運転してキミを逢いたい死者まで連れて行ってくれる奴さ」

「……………」

無言にてぺこつとお辞儀する結斗。それに対して勇人もお辞儀し返す。木夏はその様子を眺めて「あらあらー、和む光景ですねー」と言い「…………いや、キミの方が和むとボクは思っよ?」夜美がツツコむ。

「あー、まあそれじゃあアレだ。もうそろそろ出発してもらえるかな？」

そう言いながら夜美は咳払いをして「結斗は列車の運転。木夏は彼を列車に乗せてつくまでの間過去話でも聞いてやっててくれ」

「はいー、了解しましたー」

「……………了解」

そう言つと結斗は運転席へと向かい、木夏は「はいはいー勇人様も早く乗りましようねー」と言つて彼の背中を押して列車へと乗せようとする。

そんな彼女に抗い、勇人はガツと列車の壁に足をつけ入るのを食い止める。そして背後で暢気に立っている少女を見「お前は何すんだよ！？　っつーかこの状況どうなつてんの！？」

「だから友恵、という少女に会いに行くんだらう？」

「え、ちよつ今から！？　確かに俺逢いたいつつたけど唐突すぎね！？」

「何事もノリが大切と言うじゃないか」

「ここで初めて満面の笑み！？　いや、俺にも心の準備つてモンがあつてですねー！！」

「心の準備なんて列車に揺られている間にやれ。これ以上ボクの間を潰すな」

「とんだ無茶振り来たあああああああああ……!!」

「勇人様ー。早く列車に乗っていただけませんかー?」

「そして木夏さん、若干空気読めてなくね!?」

「そいつのスキルは『空気読めない』だから、致し方が無いさ」

「最悪なスキルすぎるわ!!」

「でも読むときは読むんだから面倒くさい事極まりない……」

「……若干俺様気質のお前にそう言わせるとは、やるな木夏さん……」

……

そうこう言っていると、木夏は「せいーっ」と間延びした声で箒を用いて勇人の膝を押す。俗に言うヒザカックンだ。

「のあっ!?!」と声をあげ体勢を崩した彼に畳み掛けるように「とやーっ」と箒の柄で背中の中の中心をつついた。その衝撃によって彼の体は列車の中へと消える。

「では、夜美様ー行つて参りますねー」

そう言いながら手を振ってくるメイドに対して「……キミはほわほわした声を出すわりに容赦ないね」と呆れた風に返す。

その言葉が合図の様にドアが閉まる。発車のアナウンスが何処から響いて列車が動き出す。その四角い物体を見送って。彼女は「

……さて」と呟き。

「……ボクは、あの世界と彼を繋ぐ手伝いをするとするか」

「つてか急に何なんですか!？」

数分後、勇人は目の前に座っている木夏に対して怒鳴る。木夏は木夏でにこにこーつと笑いながら「何の事ですかー?」と実に可愛らしい声で返す。

「俺のこと急に列車の中入れてきて!! しかも気がついたら発車してるってどんだけですか!？」

「まあー勇人様、あのままだと何時までも出発しなさそうでしたのでー」にこつと笑い「少し強硬手段をとらせていただきましたー」

「メツチャ和む声で怖い事言われたっ!!」

そう叫んでいると、彼はある事が心配となりバックをバツ!と見る。そこに変わらず可愛いウサギのマスコットがついてるのを確認すると安心感からのため息を漏らした。

「そういえば、先ほどから気になっていたんですがー……」木夏はすつとそのマスコットを指し「そのマスコット、男性が持つにはふさわしくないと思うんですがー……趣味ですか?」

「何で最後だけマジメな声色!? 目も真剣そのものだし!! えーっと」こほん、と彼はごまかす様に咳払いをして「俺の趣味じゃ

ないですよ。友恵が……幼馴染が作ってくれた奴です」

「へえー……友恵さん、器用だったんですねー」

「まあ、アイツって小さい時から入退院繰り返してましたから。外で遊べなくて、中で遊ぶしかなかったですからね……」

そう言うと、彼の表情がふっと柔らかくなった。どこまでも優しい表情で。その様子を見た木夏はにこつと笑み

「もしかして……いえ、もしかしなくともー」パンツと手を打ち鳴らしながら「友恵さんの事好きだったんですねー？」

「……………」彼はそれに対して暫く沈黙で答え「……はあ！？何言ってるんですか！？ お、おおおおお俺が友恵の事好きってどういう事ですか説明してもらえますかねえ！？」

「だってー、勇人さんの表情とか見ているととても幸せそうでしたしー。嬉しそうでしたからーっ」

にっこー、と喜色満面で笑っている女性を見た瞬間、勇人は「うつ……」と気圧され「……そうでしたよ、好きでしたよー……」と若干諦めた声で暴露した。

「へーっ」やっぱり好きだったんですねーっ」

「……まあ、アイツ純粹に可愛かったですし……。行動とか言動とか色々……」

そう言いながら瞼の裏に思い出す、少女の姿。

黒髪は腰を超えるほど長く、それを無造作に下ろしていた。黒い瞳だったので純日本人という印象を周囲に与え、病弱という所から儚い美少女という感じだった。

だが、儚い美少女という称号にそぐわない実に活発的な性格、無邪気な言動。

そこに勇人は惹かれていたのだろう。

「アイツ、ホントーツに無邪気だったんですよねー……雪が降ったらはしゃいで、窓の外から見える景色が変わることにはしゃいで……」

思わず口元が綻ぶ。そんな少女の声が頭を駆け巡り始めた。

「ねっ、勇人勇人っ！！ あそこに居る人つい最近まで入院してた人なんだよ！！ 退院できたんだねえ……よかったよっ」

彼女が患っていたのは大病だ。体内が徐々に衰えていく病気で、自由に動き回ることもできない。他の部位は使えるが足が全く使い物にならなかった。故、少女は病院から出るという機会は全くと言って良いほど無かった。

ただ、死して行くのを小さな病室にて待つだけ。

それでも、退院した人が居たとしたら心の底から喜ぶ。そんな優しい少女だった。

少女——英田友恵はある日、こんな事を言ってきた。

『勇人に受け取って欲しいものがある』と。

そう言っただけで渡してきたのは――ウサギのマスコット。言うまでも無く彼のバックについているものだ。

「……このマスコット、アイツが作ってくれたんですよ。でも、作ってくれた理由が悲しすぎて……」

『……なんだ、コレ？』と言うと友恵はにこっと笑い『私の代わりっ』と言った。

『友恵の代わり？　どういう意味だよ？』

『ん。つまりですねー、私の代わりのウサギ！ー』

『無駄に胸張って言わなくていいから。で、どういう意味だよ代わりって？』

『……ん、えつと、ねー』

実に言いにくいんだけどねー、と彼女は苦笑いをしながらぼろりと頬を掻き

『……ほら、私って何時死ぬか分からないでしょ？　だから、もし死んじゃった時の話』

『……………』

『うつ、何気に勇人の視線が怖い……。……分かってるよ、私だっ

てこんな話したくないもん……。でも、何時その日が来るか分からないから……。話せる今、話すんだよ」

そう言うとき彼女はウサギを抱きかかえた。そしてウサギ全体を指し

「もし私が死んじゃったならさ……。この子を私だと思って、色んな所へ連れてって欲しいんだ」

「……どういう意味だ？」

「そのまんまー。私が生前見れなかった世界をさ……。見せてほしいんだ、この子に」

彼女にしては珍しく儂く笑い、ウサギを空中に掲げながら言葉を続ける。

「勇人が見ている世界をこの子にも見せたげて。それだけで……。私は幸せだから」

「……世界を見せてくれ、何て言われちゃ閉まっとく訳にもいかなくて……。バックにつけて何時も持ち歩いていたんですよ。アイツに頼まれた通り、見せ続けようって」

列車は空を走っていた。おそらく天国、という場所へと向っているのだろう。まるで観覧車に乗った錯覚を覚えながら、勇人は下を見つめ言葉を紡ぐ。

「だから俺にとってこのマスコットは形見みたいなモンなんですよ。だからずっとバックにでもつけているんでしょうね……」

そう苦笑する少年を見、木夏は顎に手を当てた。少し悩んでからポン、と手を叩き「勇人様ー、失礼しますがそのマスコットお借りできますでしょうかー？」手を差し出す。

「へ？ ああ、すぐに返してもらえるなら……」

「ええ、ありがとうございますー」

マスコットを受け取ると木夏は顔を明るくして、胸元で抱きしめた。するとぽうつと淡く光り始める。

その現象に勇人が驚いていると、木夏は笑いながら「私達の役目は仲介ですからー、その為ならば何でも出来るんですよー」

「はあ……？」

「まあ、ちょっとした奇跡も起こせちゃうんだぞーという事ですねー」

そう言い、木夏は綺麗に笑って彼へとマスコットを返す。

それから暫く無言の時間が続いた。すると、天井に取り付けられているスピーカーから

『……………次で終点だから、降りる準備をしてください』

という若干遠慮がちな声が聞こえてくる。

「あらあらー、もうそんな時間なんですネー」木夏はそう言つと椅子から立ち上がり「勇人様ー、降りたら友恵さんが居ますから話し

てきていいですよー」

「……へ？」

「制限時間は特にありませんけどー、なるべく三〇分以内に収めていただくと嬉しいですねー」

「いやいやいや！？ まだ心の準備も何も出来てないんですけど！？」

「心の準備なんて何時まで経っても出来ないものですってー」 さで、行つてらっしゃーい」

そう言い終えると同時に扉が開いた。木夏は彼の手を取ると扉へと連れて行く。

「えっ、ちよっ色々待ってくださいって！！」

「待てませーんよー」

そう言い、彼女は悪戯っぽく笑むと……彼を電車から降ろした。箒で背中を突付きながら。

「うわ！！ っとっつと…と？」

勇人は急いでバランスを取り、体勢を整えた。そして思考回路に少しだけ余裕が出来た時。一つの疑問点にぶち当たる。

降り立ったのが駅のホームではなく地面の雪の上という事に。

(……駅のホームじゃねえの?) そう思っていたのだが……ふと、ある事に気がついた。

この雪景色は見た事があると。

そう。友恵が死ぬ前日に共に見た景色と全く一緒だと。

自然と足が動き、その中で一本だけ佇んでいる丸裸になった桜の木の下へと歩いていった。その木を眺めていると。

「——だーれだっ」

背後から突然抱きつかれ視界をふさがれる。無邪気な声、仕草。

その人物は顔を見なくても当てられた。

「……と……友恵?」

「あつたりー」

笑いながら、声の主は目を塞いでいた手をどけていく。彼が振り返ると——

あの時と変わらずに笑んでいる、死んだはずの少女がいた。

ラビット・アイ (3) (後書き)

あと少しで「ラビット・アイ」も終了です!!

いやー早い……。すぐに投稿するので、最後までお付き合い頂けましたら幸いです……っ

ラビット・アイ（４）

佇んでいる、服装もこの雪景色の中を出かけた時と同じ淡いピンク色のコートにロングスカート、真っ白なマフラーにブーツという格好の少女。髪型も声音も笑い方も何もかもが変わっていない少女。

その少女を見て、勇人は一瞬あっけにと取られた。対して少女——友恵は「何で黙っちゃうのー？」と怒っている。

「……え、いやちょっと待って。色々思考回路おいつかねえ。え、何でさっきまで桜とか舞ってたのに急に雪景色？ 何で友恵居んの？」

「えっとね、雪景色なのは……何かね、ここって死者が最後に見た印象的な景色を見せるんだって。だから私は雪景色っ」 それと私が勇人呼んだのに私が居なかったら可笑しくない？」

言いながら笑う少女を見て、勇人は更に混乱してしまう。

「え、ホントーに待って。友恵？ 何で友恵が居んの？ さっきまで友恵に逢えるって言われてたけどいざ逢ってみると情報処理が追いつかねえ——！」

「うー……ひどいよひどいよ——！」 友恵は涙目で叫んでから顔をふいっと背けつんつん、と兩人差し指を合わせながら「……だつて私勇人に逢いたかったんだもん——」

「……………」 未だに混乱状態である彼は少し頬を赤くしてから想い人を見「……友恵、だよな？」

「私以外の何かが存在するの!？」

「いや、一応気になっちまって……。……そっか。友恵、かあ……。」

彼はそう言うとし嬉しそうに口元を綻ばせた。そんな彼に対して、友恵は「……えっとね、コレ。言っておきたかったんだよ」と話し始める。

「言う前に死んじゃった、から、さ。今言わせて貰うね。……私ね、何度も生まれてこなきゃよかったって思ったんだよ?」

「……………は?」

「だって、生まれてこなきゃ辛い目に遭わなかった。生まれてこなきゃ人生がほとんど病室で終わるなんて事も無かった。だから、生まれてこなきゃよかったーって思ったの」

幾度も、幾度も。想って、願って、考えて。

「それでも、ね。……生まれてきてよかったーって思えた事もあったんだ」

「……………それって何だ?」

「もー、昔っから勇人は鈍感さんだよな。……あれ、だよ。私はね……」
「えへへ、とはにかむ様に笑いながら「勇人に逢えたから、生まれてきてよかったーって思えたんだよ?」

「……………俺?」

「そ、勇人。……私ってさ。ほら、入院ばっかで学校もろくに行けなかったし、外でも遊べなかったし。『友達に恵まれる子になってほしい』って意味の名前なのに友達全く居ない人生だったし」

彼女は軽くステップを踏みながら「こうやって歩いたりステップ踏んだりする事もできなかったし。外で遊ぶって滅多に出来なかったし。ずっと死におびえてる人生だったし」

それでもね、と彼女は言葉を区切る。くるっと回転して勇人を見つめ、にこっと笑いかけながら言った。

ずっとずっと想っていた事を。

「勇人が毎日お見舞いに来てくれたから。勇人が外の世界を話してくれたから。勇人が外出許可出た時に色んな所へ連れてってくれたから。……私、辛いだけじゃなかったんだよ？」

笑う。笑って笑って笑って。もはやこれ以上は笑えない、という程に笑って。

そんな人生だったけど勇人が居てくれたから幸せだった、と告げる。

そして――

「何時の間にか、私は勇人が好きになってしまってたみたいです」

そう、楽しげに、嬉しげに告げた。

その言葉を聞き呆然となっている想い人を見つめ、友恵は更に面白そうに笑う。

「――私は千崎勇人が好き、です。千崎勇人は…どうですか？」

問いかけられた少年は「……えーっと」と照れくさそうに頬を掻き

「……言いにくいけど……俺も好きだよ。友恵が」

「……そっか。そっかあ……。あははっ、私が死んでから両思いって分かるなんてねー」

凄い皮肉な話だねーっ ♪ と笑うが、目だけは悲しそうだった。

そして、その悲しみを紛らわせるつもりか「ね、あのマスコット貸して？」と手を出す。「ん」とだけ言いながら彼は手の上にぼん、と乗つけた。

「あははっ、もしこう握っただけでウサギが見てた世界が私にも流れ込んできたら面白いよねー」

そう言いながら、ぎゅっとウサギを握った。と、そのウサギが発光し始める。

「……へ？」

思わずほつけた声を出す勇人と友恵。

勇人から見れば友恵が光に包まれたただけなのだが、友恵からしてみれば劇的な変化が訪れていた。

先ほどの言葉どおり、ウサギの見ていた情景が急に頭に流れ込んできたのだ。

刹那彼女の脳内に、ある声が響いてくる。

『——その願い、聞き届けましたーっ』

間延びした、のんびりとしたほわほわとした声。もしこの声が実体化したのであれば雲の様にほわほわーっとしていたのだろう。そう想う程。

そしてすぐに……彼女の周りを声が、景色が、巡り始める。

まず最初に机の脚が見える。次に男子生徒のガ克兰のズボンが見え、活気付いた声が聞こえてくる。

（……教室、かな？）友恵は微かに首を傾げ（多分、コレ勇人の足だ……。足首に赤いミサンガつけてるし……）

想い人が小さい時から左足首にミサンガを付けていたのを思い出しながら予想を立てる。

それと同時に自分がウサギ視線で見ているという事に気がついた。やはりウサギだからなのか、何時も以上に周りの音が聞こえている気もする。

そして、流れ込んでくる記憶は恐らく……自分が死んでからの話だろう、と。

生前彼はこのウサギを付けている所かしまい込んでいた筈だ。それなのに何かにぶらさげているというのは、唯一の形見となったからだろう。

そんな事を考えていると机の真上からバン！ という何かを叩く音が聞こえ『あたっ』という幼馴染の声が小さく響いてきた。

『よお、勇人はよーっす!!』

『……んあ？ ……おお、はよー』

『お前また寝てたんか？ 家で寝てねえのかよ?』

『んあー……』 眠たそうな気だるげそうな声で『家じゃ全然眠れねーの。逆に机の方が寝れる……』

『それはまた特殊な……』

彼の友人だろう少年の声にてその映像は途切れる。次に映し出されたのは何処かの図書館。

しん、と静まり返った中でウサギの耳が拾ったのは彼のシャーペンの音。かりかりかり、という音をさせながらマジメな表情でノートを見つめている。

（何だかんだで成績良かったらしいからねーっ）

普段は見ないマジメな表情を見、ほんのりと頬を赤く染める。バツクは机の上においてあるらしく、彼の表情を細かく彼女に流し込んだ。

かりかりかり、という音が止まったと思えば消しゴムをかけ始めたり、行き詰ったのか額にシャーペンのノック部分を何度も当てて悩んだり。分かったら少し嬉しそうにしてからシャーペンを動かしたり。

その姿を見て少しくすつと笑む。次はまた教室らしく、またもや彼の足だけが見える状態だ。

そんな中で頭上から声が響き渡る。

『テメエこんにやろお勇人おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！！！！』

『何だよ唐突に！？ 俺の耳元で叫ぶなって！！』

『おまつ……お前、そのチョコの量は反則じゃねえか！？』

どうやらこの日はバレンタインデーらしく、彼は大量のチョコレートを買ったらしい。

それを聞きむうつと頬を膨らませながら（勇人のばーかつ。受け取るなんてさー……）

するとそんな彼女の声に答えるかのように、彼の友人に対する返答が響いた。

『いや、コレは机の上とかロッカーの中とか下駄箱とかにあった奴。直接来たのは全部断ったぜ？』

『……直接来たのは全部断ってその量ってこの裏切り者おおおおおおおおおおおお！！！』

その声は悲痛そうであり、どんどん遠ざかっていく。しかし全く気にしていないのか勇人はため息混じりで

『いやー……勝手におかれてたモンは断れな——ってアイツ何処行つた？』

『お前がとどめ刺したんだよ……』

不思議そうな勇人の声に対し、別の少年がため息を漏らしながら返す。

(……ふーん、断れるのはちゃんと断ってたんだ……)

その事実にはつと安堵すると同時に彼がそこまでモテていたという事実には驚愕する。

(確かに勇人ってカッコいいし優しいし頭もいいし……だ、だけどそんな子達の誰よりも私が一番勇人の事好きなのはっ！！)

そう自己暗示の様に想っていると更に場面は転換される。今度は外の様で、丸裸となった木が連なっている場所で男女の喋り声が届いてきた。

『……で、一体何の用事？』

真っ白い息を吐き出しながら、勇人は目の前に居るクラスメートである女子に問いかける。ウサギの目は木に向いているらしく勇人

と女子の顔は全く見えない状況だ。

『ん。……え、えっとね!!』

女子は少し慌てた声で返し、バックをがさごと漁り始める。

(何……？ え、まさか告白!?)

そう想いながら友恵が冷や汗を一筋垂らしていると『コレ……受け取ってもらえないかな?』という声と共にカサツとした音が聞こえた。

恐らく、中身はチョコレート。女子達の一大イベント、バレンタインデーなのだろう。

その様子に対して勇人は暫し無言を貫き『……悪い。貰えねえや』と本当に申し訳なさそうな声で呟く。

『……何で?』

『いや、俺さ……。そういうの貰えねえんだよ……だから本当に悪い』

パン、と手を打ち鳴らす音が寒空の下響き渡った。手を合わせて謝ったのだろう。そんな勇人に対して女子は『……じゃ、じゃあ義理って事で!!』と言って食い下らない。

『……義理でも貰えねえよ』

『……何、で?』

『……俺。ずっと想い続けてた奴が居たんだ。ずっと一緒にいたいって望んだ奴が居たんだ』

彼はポツポツと自分の想いを語り始める。

『そいつ、最近……死んじまったんだよ。優しくてさ、一緒に居たら楽しくてさ、心が温かくなる奴でさ……。それなのに、何で死んじまったのか未だに分からねえよ』

神様つーのが居たら理由を聞きたいレベルで、と言って彼は一旦口を閉じた。マフラーを少しいじりながら足元に視線を落としてまた口を開き始める。

『そんで、俺……時間が経ったとしたら、アイツの事忘れちゃうのかなって想ってたんだ。ずっとずっと。そんな心配を抱いてた』

でもな、と彼は少しだけ嬉しそうな、それでも悲しそうな声音で。

『……逆で。時が経つにつれてアイツの事忘れる所か思い出しまくってんだ』

『……へ？』

『だから、アイツが好きなのは未だに変わらねーし……多分、これから先一生変わらねーんだと想う。だから……正直に言っちゃうと、アイツ以外の奴のチョコって貰いにくいんだよなあ……』

だから本当にゴメンな、と言って彼はまた謝る。それに対して女子は『……ううん、平気だよ』と悲しそうな声で返す。そして次に

こう続けた。

『……千崎君がそんなに想い続けられてるなら……凄いいい子だったんだねっ
♪』

純粹にそう想ったらしく、女子はそれだけ言つと笑つて家へと向かつていった。

満面の笑みで手を振つてきた女子に勇人は手を振り替えていたが——姿が見えなくなった瞬間手を下ろした。そして無意識にウサギのマスコットを触る。

更に、小さく、小さく。声を漏らし始めた。

『……確かにいい奴だったよ』

友恵の視線がどんどん下がっていく。どうやら勇人がしゃがみ始めているらしい。そりゃバックに付けられているウサギの視線も低くなるだろうという話だ。

『……そりゃもうどうしようも無いほど優しい奴だったよ』

それなのに、と彼は小さく嗚咽の様に呟いて。

『……何で、アイツが死ななきゃならなかったんだよ……』

うつ、とまるで泣くのをこらえる様な声が聞こえた。

『そりゃあ、死つてのは平等に誰にでも訪れるモンだよ……』

でもな、と彼は震える声で続けて。

『……友恵は、まだ生きてても良かったはずだろ……？』

その言葉を聞いて——ぽたっ、と友恵の頬に何かが垂れた。

何だろう、と想って頬に手をやると目から涙が溢れている事に気がつく。

(……何で私は泣いてるんだろ？)

一瞬想ったがすぐにああ、そういう事かと納得する。

——生きていて欲しかった、と言われたから。

(私だって生きてたかったよ……そりゃあ体は自由に動かないし親にも迷惑かけてばっかだったし外の世界にも滅多に出られなかったし)

それでも——

(——勇人ともっと一緒に居たかったから)

どんなに辛くても彼と一緒にいたら楽しかった。嬉しかった。幸せだった。

恐らく、人生でたった一つだけの一番良好な出会い。

好きだった。いや、過去形ではなく今も好きだ。

だからこそ……彼女は最後の願いにコレを選んだのだろう。

——千崎勇人に逢いたい、と。

ラビット・アイ (4) (後書き)

あと一話くらい、ですかね…

最後まで、どうかお付き合いお願いします…!!

ラビット・アイ（5）

「——えっ、友恵っ！！」

彼女が意識を取り戻すと勇人が心配そうに顔を覗き込んでいた。彼は友恵が目をつと開いたのを見てほう、と小さく息を漏らして「ったく、心配せんじゃねえよ。お前が唐突に光りだしたと想ったら、倒れるんだからさ……」

「ごめん、ごめん……。いやーその分いい物が見れたんだけどねっ」

「いい物？」と不思議そうな表情になる彼を見ながら「まあいい物だよ」と返す。

ゆっくりと上体を起こした。頭を軽く振り、ウサギを彼の手に返す。

「ありがとね、貸してくれて」

「いや……コレ元たどればお前のだし」

「でも今は勇人のだしねー」

そんな話を話していると、彼女はふつと笑って「ねー勇人、一つお願い事頼まれてくれない？」

「お願い事？」

小さく首を傾げると、少女は満面の笑みを浮かべた。

「うん♪ あのね……」ほんのりと頬を赤く染めながら「……キス、してもらえるかなあ？」

「……………はあっ!？」

唐突な彼女の発言にボンツと顔を赤くする勇人。それに対して友恵は「わ、私だって恥ずかしいんだからね?!」と叫んでいる。

「で、でも勇人が帰っちゃう前に……そ、そのほら折角両想いだっただし……何かそれっぽいのしたいなー、って想っちゃったり?」

「……はあ」

「だ、だからほらー……ねっ!？」

「最後お前誤魔化したよな完全に……」

そう言いながら、彼はゆっくりと彼女との距離を縮める。彼女の頬に軽く触れ、若干邪魔な位置にあった髪を梳くと、彼女の口に自分のそれを重ね合わせた。

暫くしてから離れると、彼女の顔が更に赤く染まっている事に気がつく。その姿を見て勇人も更に赤く染まってしまう。

そんな沈黙に耐え切れなくなった友恵は何か言葉を発しようと口を開いたのだが、最初に出た言葉は――

「手馴れてませんか!？」

「はあ!？」

「いや、何て言うかその初めてやったというには余りにも上手すぎるといいますかなと言いますか動作に無駄が全く無かったといえますか……!! 結論言っちゃうと初めてじゃなかったでしょ!？」

「何言ってるんだよ!？ 俺が一体何時何処で誰とやったっつーの!？ 俺だって今のが初めてだったんだからな!？」

そしてお互いの発言を聞いて更に赤く染まる二人。いわゆる自爆である。

「……ん、まあそれはおいておいて、だ」彼はこほん、と誤魔化すように咳をしながら「……結果的に俺はどうしてここに呼ばれたんだ？」

「んーと……ただ、勇人に逢いたかったっただけなんだけど……」

そーだなー、他にあるとすれば……と言いながら彼女はうーん、と唸り「……約束、してほしいかな」

「……約束？ 何の約束だ？」

「うん、その、ね……」彼女は若干寂しそうに笑うと「……私のこと、覚えていてほしいんだ」

「……………」

「ほら、今回は特別に逢えたただけだし、これから先は絶対に逢えな

いし？ だから……これから先、生きていく中で少しでも私のことを覚えていてほしいんだ」

友恵は笑いながら小さな声で呟き始める。

「……ほんの少しでもいいから私のことを覚えてて。こんな子がいたなー、程度でいいの。……私よりも好きな子とかができたとしたら……もう付き合っちゃえっ」

そう言いながら彼女は無邪気に笑う。それでも内心では辛かった。

勇人は今を生きる現在の人ならば、自分は過去を生きる過去の人なのだから。

彼はこれから先成長していくが、自分の時は永遠と止まったままなのだから。

自分という存在に囚われずに、好きな人ができたのならば付き合い合っ
てほしい。

そう思っていたのだが――

唐突にぼん、と頭に手が乗った。不思議そうな表情をして顔をあげると勇人が微笑を浮かべていた。そしてぼんぼん、と頭を撫でながら

「……ありがとな、俺のこと心配してくれて」

だけどき、と呟くにつと笑い「これから先、友恵以上に好きな奴なんて絶対にいねーよ。できねーよ」

「……………へ？」

「俺、友恵みたいにならずと病院の中にいた訳じゃなくって、学校にも行ってただろ？　女子との接点も結構あったわけじゃん」

それでも、やっぱり。

「どんな奴と一緒にいても……友恵以上の女子なんて居なかったんだよ」

「……………」

「だから、心配すんなって。他の奴らはお前のこと徐々に忘れてくかもしれないけど……俺は一生覚えてるから。全部、全部」

一緒に笑ったことも、喋った内容も、見た光景も。

「思い出し続ける。お前との約束絶対に破らないから。それにさ——」

ウサギのマスコットを彼女の眼の前にかざし、にこっと笑んで。

「——こいつに色々な景色見せてくから」

それを聞いた瞬間、彼女の目から涙がポロポロ流れ始める。

止め処なく、ポロポロと静かに流れ続けた。

その様子を見て勇人はさらに友恵の頭をなで「……………やっぱりお前ウ

サギみてーだな」と言うとな彼女は「……なっ、何でよ……」と泣きじゃくり始めた。

「ほら」彼はにっと笑い「寂しがり屋のウサギは寂しいと死んじやうから、寂しがらないようにずっと一緒にいてやれってさ」

でも、もう俺は行かないとならないから……と言いつサギのマスコットを見ながら笑い。

「こいつとずっと一緒にいるから、それで我慢しろよ?」

「……は、はっ……。やっぱ、勇人って酷い位に優しいよね……」

こしこしと涙を拭いながら彼女は言う。

「折角泣かないでおうと想ったのにさ——そんな言葉かけられたら泣いちゃうに決まってるじゃんかあ……」

そう言っとな彼女はさらに涙を流す。

彼は若干涙ぐみながらも笑みを湛えて優しく彼女の頭を撫で続けた。

そんな事を何時まで続けていたのだろうか。

それさえも分からなくなってしまうた中で、彼女は「もう、平気」と小さく呟いた。

「ん?」

「もう平気……」　ありがとねっ」

そう言いながら、彼女はにこっと満面の笑みを浮かべる。

それを見て彼もふっと笑み「どういたしまして」　と返した。

そして別れの時が訪れる。

彼は立ち上がると彼女へ手を差し伸べた。友恵は「やっぱ優しいねーっ」　笑ってその手を取り立ち上がる。

手をそっと離し、友恵は数歩後ろへと下がった。

そしてぐいつと目を拭い、残っていた涙を服にしみこませる。

泣き続けていたから、きっと目は赤いだろう。まだ話していたい、という想いもあったがそれでは彼があちらへと戻るタイミングを失ってしまふ。

だから、これが本当に最後の別れだと分かっているながら。

彼女は手をメガホンのようにして口元に持っていく、すーっと息を大きく吸うと

「――じゃーねっ!!」

大きく声を張り上げて。満面の笑みで彼へと手を振った。

対して勇人は振り返ると、にっと笑いウサギのマスコットを見せながら手を振りかえす。

二人ともこれが本当に最後だと分かっていた。

それでも、最後だからこそ。

満面の笑みで終わりにしよう。

彼はゆっくりと列車へと乗り込む。木夏は扉を閉める時にこちらに向かって口を動かしている少女を見た。

何故か読唇術を得ている木夏はそれを正確に読み取る。

『勇人に逢わせてくださって、ありがとうございましたっ』

それを読み取った際、木夏はにこつと笑い「いえー、お気になさらずー」[♪]と返した。

声は届いていなかっただろうが、友恵は可愛らしい笑みを浮かべてぺこつと頭を下げる。

扉が閉まり、列車は発車し始める。

彼女はその中でも頭を下げ続け――

あえて、彼の去りゆく姿は見ないようにしていた。

「しかし、意外でしたねーっ」[♪]

木夏が笑みながら呟くと「何がです？」と勇人は首をかしげる。

「いえー、大抵死者と逢った人って泣いてしまうので勇人様も泣かれるのでは思ったんですがー、お泣きになられなかったのー」

ああ、その事かという風に彼は頷き

「そりゃ、泣きたかったですよ。もう絶対に逢えないと想っていた友恵と逢えて。話せて。メツチャ幸せでしたから。それでも……」

にこつと彼は笑み。

「……あいつは最後、笑って終わらせたかったみたいですから。それなら俺も泣かないべきでしょう？」

それを聞いた木夏は「そうですかーっ」と満面の笑みを湛える。どこか満足そうな表情だ。

そんな様子を眺めながら、勇人はふとある事を想い「そういえば」と彼女へと問いかけた。

「木夏さんに聞きたいことがあったんですよ」

「どんな事ですかー？」

「えつとですね……友恵と逢えたので、ここが不思議な場所だつていうのは分かりました。けれども——木夏さん達って一体何者なんですか？」

それは彼の心の奥底に引つ掛かっていた疑問。

ここが不思議な場所だというのは理解できたが、では何故そのような場所に夜美、木夏、結斗が居るのだろっ、という疑問。

その質問に対して木夏はにこつと笑み

「そうですねー、では、昔々のお話をしましょうかーっ」

話し始める。

とある存在の話を。

「昔々、ある神様が居りましたー。その神様は生者が生きる世界と死者が逝く世界のパワーバランスを整える神様でしたー」

そんな神様はある日想ったのですー、と彼女は間延びした声で続ける。

「『何故死者と生者が逢ってはならないんだろうね？』とー。なのでその神様は己の力を利用して生者と死者を繋げる駅を造りだしましたー」

勇人は首をかしげながら聞いている。木夏はにこにこと笑みながら

「そしてその想いに賛同した天使や死神や悪魔がお手伝いしているという訳ですーっ」

その話が終わると同時、夜美が待つている駅へと到着した。結斗のアナウンスを聞きながら勇人は「……えっと、それじゃあ木夏さんや結斗さんは一体……」と言うと。

彼女は変わらず満面の笑みを浮かべて、それでも目は勇人をしっかりと射抜きながら。

「よく言っじゃないですかー、『名は体を表す』ってーっ」

「おや、帰ってきたのかい？」

そう言つと夜美は読んでいた本から顔を上げた。

勇人はあきれた溜息を漏らし「……お前は呑気だなー」

「ふむ。傍から見れば呑気にみえるかもしれないが、こつ見えてボクも結構働いていたんだよ？」

「まあ、それは置いておくとして、さ」勇人はにっと笑んで「ありがとな、友恵に逢わせてくれて」

「……用事は全部済んだのかい？」

「ああ、お陰さまでな」

「ふむ、キミが上機嫌だと実に不気味に感じるのはボクだけかね」
一人で呟きながら「なら、用はもう無いのかい？」

「……あーっと。あるっちゃーあるんだけど……」

「何だい？ 言ってみたまえ」

「えつとなー……」彼はピツと下を指しながら「どうやって帰んの？」

「……キミは自分の来た道さえも思い出せない程馬鹿なのかい？」

「いや、俺勝手に連れてこられたんだし。自分で来た記憶なんて全くねーし」

「ああ、そうだったね」彼女はくいつと顎で桜並木を指し「あそこをずっと歩いていけば元の世界へ帰れるよ」

「そつか。……んじゃー俺帰るわ」

「そうかい。ならばさっさと帰りたまえ」

しっしつと手で彼を追い払う仕草をする少女。それを見て「最後までその態度変えんのな……」と彼はあきれた風に呟く。

それでもぺこつとお辞儀すると桜並木へと歩いて行った。

バックにウサギのマスコットをぶら下げた少年は、ぶわつと吹いた暖かい風が運んできた桜の花びらに紛れ——風が去った後には消えていた。

彼が目を覚ますと、そこは学校の机の上だった。夕日が落ち、教室内を赤く染めている。

ゆっくりと上体を起こしながら（……夢、だったのか？）

そう一瞬想ったが、すぐに夢じゃないと知る事となる。

手を開くと、桜の花びらがあったからだ。

おそらく最後の突風の時に握りしめてきたのだろうそれを見て、ふっと笑み。

夜美達を思い出して感謝の意を捧げた。

そしてウサギのマスコットへと視線を落とし、軽くその頭を撫でて。

「——色んなトコ、見て回ろうなっ」

笑って呟く。このウサギと、ウサギを作った少女に向けて。

刹那、開け放たれていた窓から風が吹き、ウサギが揺れる。

友恵が同意したみたいだな……、と想いながら、彼はバックを持って帰路へとつく為、教室を後にした。

彼女との約束を果たそうと決意した目で。

ラビット・アイ (5) (後書き)

……はい、完結です!! 落ちませんでしたね、ええ!!

えっと、「ラビット・アイ」は終わりましたがまだまだ続けるつもりなので……!! その為に木夏で伏線はったといっても過言じゃないです!!

では、次回の話も早めに投稿しようと思うのでよろしく願いします……♪

ハナナス（１）

毎日が嫌で嫌で仕方が無かった。

生きているのが辛くて辛くて苦しかった。

だから、そんな人生と離れたくて。

だから、そんな人生を終わらせたくて。

彼は――

その日、空を飛んだ。

彼が空を飛ぶ、数分ほど前の事。

彼は開け放たれた学校の屋上で黄昏ていた。

黒髪に青縁のメガネ、黒い瞳。ブレザー型の制服に身を包んでいる。顔立ちは整っているほうであるが、真面目なオーラなので話しかけるのを躊躇わせた。

そんな少年は、ぼうつと空を眺めていた。どこまでも遠くを見据えている様にも感じる。

そして、そんな少年は小さくため息を漏らした。

（……つまらない、こんな人生は実につまらないな）

そう思いながら更に深くため息を漏らす。

（つまらなすぎて、欠伸が出るほどに）

実際に欠伸をしてみせ、彼は薄く笑った。

（ああ、本当につまらなくて退屈だ。何処までも何処までも。幾度となく同じ日を繰り返していく、ただそれだけの人生だからな）

朝起きて、学校へ行って、勉学に励み、友人たちと談笑し、帰宅し、何か娯楽をしてから寝る。

起きる時間、登校する時間、勉学の内容、話の中身、帰宅時間、娯楽内容は一日として同じではない。

だが、流れとしては毎日同じなのだ。

そんな平々凡々な人生に終止符を打ちたくて。

そんなつまらない人生に爆弾を落としたくて。

彼は、ガシャツという音を鳴らしながらフェンスに足を乗せる。

そして顔には生きていた頃には絶対に見せなかったほどの無邪気な笑みを湛え。

これからこのうんざりする程の最低最悪な人生から解放される、と思うと「はっ！！」という笑い声が口からもれだし。

それでもまったく悔いは無い、という表情で。

——空を飛んだ。

彼が目を開くと、そこはとある野原だった。

大きな木の下に寝そべっており、木の葉の隙間から陽光が彼に降り注ぐ。手で目を翳し、軽く目を細めた。

そして自分に残っている記憶をさかのぼる。

フェンスを蹴った後、彼の体は地面へと落ちて行った。

重力に逆らうことなくどんどん落ちていき、予想よりも早く地面へと体がぶつかる。

激しい衝撃が彼を襲い、周りの一拍遅れた甲高い悲鳴が響き渡る。

近くで練習していた野球部員が「おい、大丈夫か!？」と声をかけてくる。

だが、その声もどんどん遠ざかって行つて。

彼の意識はすぐに途絶えた。

その時の事を思い出していると、ひとつの事実が思い浮かぶ。そして彼はさして驚きを見せることなく

(……ああそうか、俺は死んだのか)

そう想いながらくつくつと笑ってみせた。

ゆつくりと体を起こすが痛みなど全くなく、逆に生前よりも動きやすい気もする。

周りを軽く見渡し、地面に咲き誇っている花たちを一瞥した。

色合いは白、紫、赤の三色。それを見ながら、彼は花の名前を呟き始める。

「シロハギ、ハナナス、大文字草、シロバナマンジュシャゲ、ヒョドリジョウゴ……って何だ、このセンスは」

そこに咲き誇っている花たちを見つめながら彼は首を軽く傾げた。

その様子を遠目から眺めていた人物はゆつくりと歩を進め始める。

さくつと土を踏む音が聞こえたので、彼はそちらを振り返る。するとそこには。

大きな駅長の服を着た少女が立っていた。

肩口で切りそろえられた黒髪、少し釣り上った瞳は深い深い緑色をしている。年は一三ぐらいだろう、その所為か成人男性用の駅長服はだばだばで彼女の小さな手も隠しているほどだ。

彼が少女を眺めていると、少女の手の中に紙の束があるのに気が

つく。

少女はぱらぱら、と中を捲りながら彼に歩み寄り続け

「……サイジヨウ ジュンイチ斎場 潤一、没年一七。一〇月二七日午後四時三六分死亡、死亡理由自殺……か」

ふう、と息を漏らしながら彼女は紙を捲る手を止めて彼へと向き直った。

そして深い深い緑色の瞳にて彼を射抜き。

「本来、死者の管轄は木夏なんだが、致し方が無い。アイツが用事があると言っていたのだからね」

さて、と言うと言葉を区切り。

「——キミの最後の想い残しを叶えて差し上げようじゃないか」

どこまでも、どこまでも妖艶に笑んで。

どこまでも、どこまでも可愛らしい声で。

少女——桃天 夜美は死者に対して問いかけた。

「いくら自殺を志願して死んだとはいえ、心残りぐらいはあるだろう？ さあ、言ってみたまえ。ボクが叶えてあげようじゃないか」

その問いかけを聞き彼は一瞬茫然としたが、すぐにくつくつと笑みをこぼす。

その態度を不服に感じたのか夜美は眉を潜め「……人の発言を聞いてからその様な笑いをするとはキミは随分と失礼なようだね」

言葉を耳にした彼、潤一は顔を上げて少女を見上げる。少女は少女でまるで見下すような視線を彼に向けていた。

潤一は一体何が面白いのか、更にくつくつと笑む。

そして、小さく口を動かし始めた。

「……ここは死後の世界、死んだ後の世界ということか。……非日常。終わってしまった魂が集う場所、終わったはずの人生が再出発される場所。——ああ」

そうだな、ひとつ心残りがあるとすれば——と言うと彼は言葉を区切り、実に恨めしそうな視線を夜美に向け

「——また、人生を送らなければならないという事だな」

吐き捨てるように、呟いた。

ハナナス (1) (後書き)

えっと、という訳で新たな短編です!!

今回は自殺した少年の話でして……前回とは打って変わって悲しさの方が大きいと思います……。

まあ、最後はむりくりハッピーエンドに繋がりますけどね!!

では、また♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4682z/>

空中列車 - aerial train -

2011年12月19日21時48分発行